

ほほえみ 第26号



明けまして、おめでとうございます。2013年、平成25年の幕開けですね。昨年中は、いろいろとお世話になりました。今年も、昨年以上に、診療科としても個人としても、様々なことにチャレンジしていきたいと考えております。至らない点も多いかとは存じますが、何卒、今年も宜しく願い申し上げます。

読書三昧

新しい年を迎えましたが、今回は診断や治療の話ではなく、読書の話題と致します。

昨年は、読書会を始め、何冊か本と一緒に読んだ方もあるし、あまり進まなかった方もあるのですが、個人的には、読書は習慣でもあります。若かりし頃？は、様々な長編小説を読んでいた頃もあったのですが(ジャン・クリストフ、戦争と平和など)、読書には王道があるのかもしれないと思うようになったのは最近です。とりわけ、この一年ぐらいは強く感じています。

読書の王道とは、史・経・集というものです。史はその通り、歴史書ですね。純粋な歴史書のことを言うのですが、「孟嘗君」や「晏子」(宮城谷昌光)のような小説なら、一気に読めます。史は、物事の枠組みというか、認識力を高める読み物であり、やはり欠くべからざるものと思います。認識力の鋭さで驚いたのは、橋本左内ですね。橋本左内は安政の大獄で井伊直弼に26歳の若さで目の敵とされています。彼は江戸幕末に既に、日本の行く末を洞察して、ロシアと組んで英国と戦うか、英国と組んでロシアと戦う運命にあり、結局、勝ちきれなくても完敗しなければ、国として存続すると予想していたのです。実際の歴史は彼の予想通りで、日英同盟を結んだ日本がロシアと戦い、講和するという結末でした。こんな人並みはずれた洞察力には、怖さがあるのですね。

経はストーリーのないもので、論語や大学みたいに、思想のエッセンスと言えるものです。最近まで、このようなものが面白いとは思いませんでした。しかし、40歳台も後半となったせいか、経を読むのも面白いと思うようになりました。経の不思議なところは、その都度、読み方が変わるということと、何か困った時に、ふと思いつくかぶ語句は経の言葉であるところですね。東洋的なものが、まず頭に思い浮かびますが、先日、カール・ヒルティの「眠られぬ夜のために」というものを読んでいて、これもキリスト教的な背景はあるものの、一種の経だなと思いました。この本は、一日一話になっていて、短い文章ばかりなのですが、ヒルティの思想のエッセンスが抽出されているので、経と似てくるのです。

集というのは、いわゆる全集を読むということで、これは樋野興夫先生から学んだ読み方ですね。新渡戸稲造全集とか内村鑑三全集とか、気に入った人の全集を読んで、人物を通して物事を理解するというやり方です。これは、パワーが必要な読み方で、若いうちにやっておくことかもしれません。残念ながら、遅きに失した感もありますが、今は新渡戸稲造をコツコツと読み進めています。

読書の王道と思いを合わせた事柄で、佐藤一斎の三学戒というものがあります。

少にして学べば、則ち壮にして為すこと有り。
 壮にして学べば、則ち老いて衰えず。
 老いて学べば、則ち死して朽ちず。 (言志晩録)

私だったら、ギリギリ老いて衰えずくらいでしょうか。自ら反省することも多いため、読書好きな30歳前の人を見つけては、読書のお誘いをしています。壮にして為すこと有りという方が、出ないとも限らないと、密かに期待しております。

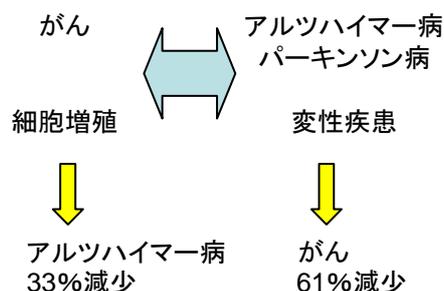


がんとアルツハイマー病

がんとアルツハイマー病が逆相関するという臨床研究があります。米国のコホート研究である、フラミンガム研究の解析なのですが、がんの患者さんではアルツハイマー病の発症リスクが33%低下し、逆に、アルツハイマー病の方では、がんの発症リスクが61%低下していました。

この研究は疫学研究なので、何故、このようなことが起こるのか、わからないのですが、がんとアルツハイマー病は、相反する性格を持つと言えます。パーキンソン病でも、がんの発症リスクは27%低下することが知られており、神経変性疾患で共通する現象なのかもしれません。

がんになるのと、アルツハイマー病やパーキンソン病になるのと、選択せよと言われたら、返答に困ってしまいますが、がんのような細胞が異常に増殖する疾患は、神経細胞が減るような疾患とは、相容れない方向にあるというのは、医学的には大変興味深い現象ですね。



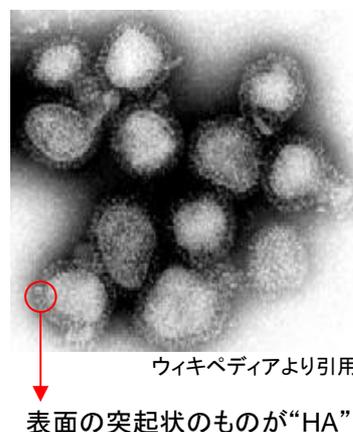
インフルエンザの予防と迅速診断

毎年、この季節は、化学療法を行っている方にとっては、インフルエンザの予防や早期の治療に関して、質問が多い時期であり、ワクチンとインフルエンザの迅速診断キットに関してまとめてみる事にします。

以前に、我が国では学童のインフルエンザ・ワクチンの集団接種が行われていました。その時には、不活化したウイルス全体を接種していました。大量のウイルスを得るために、ニワトリの有精卵を用いてウイルスを増殖し、集めたウイルスを不活化していました。卵を使うことに加え、ウイルス全体を使うためアレルギー反応が比較的多いという難点がありました。最近では、ウイルス全部を使うのではなく、ウイルスの表面にあって型を決定しているヘマグルチニン(HA)という分子のみを抽出して、ワクチンを作製しています。そのため、アレルギー反応などの副作用は大幅に減少してきています。通常、3型のウイルスに対するワクチンとなっており、今年もA/カリフォルニア(H1N1)、A/ビクトリア(H3N2)、B/ウィスコンシン(WSN)の3株となっています。

ワクチンの有効性は、概ねA型で60%強程度、B型では50%弱です。これは、本来A型で100人発症するところが、30-40人に抑えられるということであり、感染しないということではありません。またB型インフルエンザが流行し始めた場合には、ワクチンをしていても、感染する可能性は比較的高い(約50%)ので、注意が必要になります。

インフルエンザの迅速診断には、鼻粘液からウイルスを検出する診断キットがよく使われていますが、感染していてもキットで陽性にならない可能性もあり、特に発熱し始めてから12時間以内では検出感度が低いので、抗がん剤投与中(成人)の方は、抗ウイルス剤の投与を積極的に考慮する必要があるかもしれません。抗ウイルス剤も、耐性化ウイルスには無効なので、一番は感染機会を減らすことです。



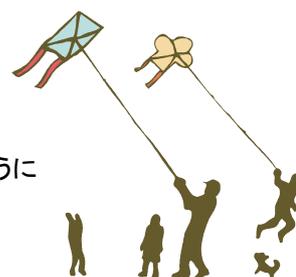
うがい、手洗いやマスクなど
予防を心がけましょう

MEMO

1月のがん化学療法科の予定

1月2日	外来化学療法を行います。
1月4日	仕事始め
1月11日	柴田教授外来
1月14日	成人の日
1月18日	柴田教授外来
	新渡戸稲造記念 メディカル・カフェ

皆様にとって、
良い一年となりますように



掲載記事の無断転載を禁じます